

日記に内在する無意識の心理について
—御堂関白記における雨の記述を中心にして—

蘭 香代子*

About the Unconscious Psychology That Exists Inside the Diary
— Mainly the Description of Rain in [Mido Kanpaku ki]—

Kayoko ARARAGI*

Abstract

When people speak about “the contents of their dreams”, they often talk of “repeated words and mistakes”. If when describing a background scene of a dream it is thought to express one’s unconscious psychology. In the diary of Mido Kanpaku-ki, Mithinaga mentions 17 cases of his dreams. However, he does not go into detail of the actual dream. Thus, he refrains from completely revealing the psychological state of his unconscious. This is very apparent if compared to the diary of Kagerou.

In the diary of Mido Kanpaku-ki, Mithinaga particularly mentions a background description which has an overwhelmingly number of references to the weather, especially rain. This is more prevalent in Mido Kanpaku-ki, compared to Kagerou’s diary, Tosa’ diary, and also that of Gonki. The colourful description of rain is mentioned many times, especially raindrops, the size and the abundance of rain. Such writings of the rain were indeed rare, as at that time, it was neither an obligation nor a custom to have to describe the weather in a diary. Therefore, this is considered to be an expression of Mithinaga’s peculiar personality and a manifestation of his unconscious psychological state of mind. The following are observations about rain featured in Mithinaga’s diary : 1. The number of descriptions of rain not only refers to the raindrops and the rainfall but also how it increases, for example “it poured all night” ; 2. Furthermore, the ratio of rain increases with an increase in age ; 3. In addition, the reference to rain as a “shooting arrow” is seen as being a metaphor to Mithinaga’s own sense of an attack on him from his surrounding public community ; 4. Compared to Gonki (991-1001), the difference is in the clearer, as in Gonki, there is only about ten entries about rain.

Michinaga in Kanpaku-ki, mentions the practical politics of day to day, but when writing an entry, it is possible that he unconsciously wrote his personal feelings. These feelings were : 1.

*人文学部 人間関係学科

Written as purification of his stress or any conflict brought on by his position ; 2. His gratitude towards his power ; 3. The rain is viewed as a symbolic means of purification of his and regeneration. These three references could be seen as what Jung has refers to as the “Self-Power of healing”. Rain symbolizes the nurturing of his self-healing-power, even to a seemingly powerful man, like Michinaga.

人間は元来、「夢」や「言い間違い」、「繰り返すことば」、「背景となる情景描写」などに無意識の心理が表れるが、フロイトやユング、フロムらは心理臨床の立場から、「非合理的なものの表現」としてこれらの無意識を理解している（蘭、2007）。特に日記は自己の身辺を描くことが多く、一般的には意識・無意識が表現されやすい。ここでは主に御堂関白記における無意識の心理を中心としながらも、蜻蛉日記や土佐日記と比較しながら、道長の心理変化を考察していくことにする。

（1） 心理学的にみる無意識の心理を考える 「夢」の記述

御堂関白記は、道長が政権を獲得した長徳元年から記し、現存しているものは長徳四年（998年）からであり、寛弘元年（1004年）からは継続的に書いている（倉本2009）。

この道長の無意識の心理が心理学的に考察できるのは、第一に日記に描かれた「夢」の記述である。道長は関白記に夢を書いているが、その件数は17件であり、倉本(2008)によると、「夢」の記事が17件、記主の「夢」が11件、口実の「夢」が10件、その他の「夢」が7件、ということである。しかも御堂関白記における道長の夢は、そのほとんどが外出、または参列への回避の根拠（口実）のものであり、具体的に夢の内容を記述していないのが特徴である。ところで平安期の他の日記の「夢」を捜してみると、「土佐日記」では、ほとんど「夢」の記述はない。12月21日の「別れの宴」から書かれ、2月16日の京に着いた記録で終わるのだが、夢の記述も夢内容の記述もない。『蜻蛉日記』には夢の語が28回みられるが、そのなかで顕在夢は10回である。また『和泉式部日記』では夢の記述は7回あるが、顕在夢はない（倉本2008）。『紫式部日記』には夢が5回みられるが顕在夢は一例もな

い（倉本 2008）。

それでは心理学的には無意識の深層を示すといわれている「夢」を関白記と蜻蛉日記から比べて考察してみよう。

<関白記の「夢」記述>

1) 口実の夢（10件）記の一例

例：諸社奉幣の事が有った。ところが夢が宜しくなかったので参入しなかった。この日、土御門殿の新馬場に初めて馬を馳せた。公卿たちが多く来た（999年、2月20日）。……このような不参の口実として夢が良くない、を記述している。

2) 儀式に関連する夢記例

さらにその他の夢（7件）では、宗教的な行事や政策を実行する口実的なものが多い。

例：今朝、定好に講師宣旨を下した。これは夢に依るものである（1000年3月20日）。……道長の「夢相」によって、興福寺の講師が決まったということである。

しかし道長の夢でない場合は、夢内容の記述もある。

例：今朝、一条天皇は御夢を見られた。「酒を飲む夢を御覧になった」ということだ。すぐ

に奏上して云ったことは「雨が降るのでしょうか」と。酉の時ほどに参上した。「天気」（天皇のご機嫌）は、宜しかった。退出した後、午刻の後、小雨が降った。天が感じるものが有った。雷鳴があった。

……この年の夏は炎旱が続いていた。一条天皇が清涼殿の庭中で雨乞いの祈祷をした朝の夢である（倉本、2008）。

特に道長の1013年2月26日の「二度の夢想があった」や、1013年3月3日の「夢想による修繕」など、がある。

心理学的には無意識な心理の表れとみられる「夢」は、道長の日記のなかでは言葉少なで、その無意識の心理を汲み取るのは、難しい。道長にとって「夢」は具象化するものではなく、行動を正当化する直感的な道具であったと考えられる。つまり998年から1021年までの長期間の日記でありながら、夢想の記が17回しかないという倉本（2007）の報告からみても、「夢」に具現化する無意識の心理をみないようしてきた。つまり不合理な夢に惑わされずに、むしろ不安的な夢は抑圧して、現実的に政治の一環に組み入れ行動化していた人物と云えよう。

これに対して、蜻蛉日記では夢が内容を伴って記されているところがある。

<蜻蛉日記の夢記述>

1) 不安の具現化としての夢の例：968年5月・7月（33歳）

例1：五月に、貞観殿尚侍藤原登子さまが、先帝の御除服のために退出する際、先のように「こちらへ」と言っていたのに、「不吉な夢を見た」と言って、あちらに退出した。その後も、しばしば夢の告げがあったので、「夢違えの祈祷をしなくては」ということで、七月、和歌を寄こした。

村上天皇の寵愛を受けていた登子に悪い夢が

続き、作者と会うことが少なくなっていった頃の記載である（倉本）。心理をみれば和歌を寄こすことによるつながりを示しているものの、登子の夢のせいで会えないという、不安や問題を個人に問うのではなく、あいまいな夢というものに責任を転嫁している。

2) 無意識の深層が明確に表現された夢の例：971年（36歳）

例2：父の家で長精進し、二十日ほど勤行を続けた日の夢に、私の髪を切り落とし、額髪を分けて尼姿になるのを見た。その夢の吉兆はわからない。七・八日ほどして、私の腹の中にある蛇が動きまわって内臓を食う。これを治すには顔に水を注げばよいという夢を見た。これも吉兆はわからないけれども、このように記すわけは、この身の行く末を見聞きした人は、夢や仏は信じられるのか、信じられないのか、決めてほしいと思うからである。

兼家の訪れが途絶えがちな折り、作者が山寺に籠もろうとしていた頃である。

倉本（2008）は、この夢と作者について、性欲願望と捉えるよりは、古来の仏教の考え（女の体内には血の池があって蛇が住んでいる）というような、抑制できない感情が、蛇が動きまわるというあらわれ方をしたと、見ていきたいと述べている。そして倉本は、自分の見た夢を自己分析し、夢の様相を冷静に記録した後で自分の将来を客観化している点で作者の態度を評価している。

3) 予兆的な夢の例：972年2月（37歳）

例3：石山に一昨年参詣した時に出会い、私に代わってお祈りしてくれるよう頼んでおいた法師の許から、このように言ってよこした。「去る五日の夜の夢に、あなたが二つの手に月と日を受け、月を足の下に踏み、日を胸に当てて

抱きなさっていると見ました。これを夢解きにお尋ねください」と。……………私自身の、一昨日の夜に見た夢は、右の方の足の裏に、男が「門」という文字を書き付けたので、驚いて足を引っ込めたというものである。……私の一人息子が、もしかしたら思いがけぬ幸運に見舞われるのではないかと、心の中で思った。

これらの蜻蛉日記の夢は、まさしく現在にも通じる夢記載であり、夢の分析でもある。つまり日本人の無意識の第二の層に通じる集合的無意識の表出に通じているからである。

しかも、蘭（2006）や蘭（2007）における夢の研究報告と照合できるものである。蜻蛉日記では、夢に現れる具象と冷静に向き合っている点で、より夢に表れる不合理を統合して作品として完成させているので、むしろ日記文学と言える。

（2）「背景描写（無意識の心情が投影されやすい）の繰り返し」にみられる 無意識の心理：「地」としての雨の記述

1) 背景として記述される個人的無意識の心理

ところで心理臨床のアセスメントとして検討されるひとつに描画法がある。この描画における背景の描写には、個人の抑圧された思い出や見たくない現実などの意味深い暗示、暗喩などが表現されていることが多く、無意識の心理をアセスメントする手がかりでもある。特に背景にある動き（風、木々、天気など）が起こる場合は、環境調整ができるようになっていることも示され、主人公の地の部分として意味ある象徴とみなされている。また描画における背景の基調色は、作者の気分状態を示す場合が多く、個人的な無意識の心情を象徴していることも多い（蘭、2008）。

具体例をあげると「雨中人物画テスト」は、Abrams, Aらによって記述され、Hammer

（1958）によって心理臨床に適用されていったが、ひとが日常の環境のなかでストレスサーとして雨を感じ、どう防御していくかといった側面を検討している。

しかるに日記を描画として見ると、図になる部分は「できごと」や「行動の記録」「意識した心理」であり、その背景に基調色としての天気がまさに作者の気分や言語化したくない無意識の心理として表現されていると言える。もちろん地になるのは天候だけでなく、風景や季節感などの色彩も含まれるが、日記に描かれる部分で大きいのは、天候の表現のしかたと言っても過言ではない。

そこで地（背景）となる文を詳しく見ていくと、「関白記」や「土佐日記」では、晴れの記述よりも「雨」の描写が多く、曇りや雨に託された個人的無意識の心理が読み取れる。なぜなら、このふたつの日記では天気を書かない日が多いからである。日誌としてさえ天候は義務ではなく、記載ない日が多い当時では、天候はむしろ添えられた無意識として捉えることができる。ここではこれらの日記に多く書かれている「雨」の記述（土佐日記では風がやや多いが）の個人的な無意識を考察していく。

2) 集合的無意識としての「雨」と「水」

ところで、個人的な無意識のその基底には集合的な無意識があり、「心理臨床大辞典」によれば、次のように位置づけられている。

Jung, C, G (1906) は、人間の心の構造として三つの層を分けているが、それは①意識、②個人的無意識（無意識の第一の層）、③集合的無意識（無意識の第二の層）である。①と②の基層に③があるとされている。③は表象可能性の遺産として個人的ではなく、人類に、むしろ動物にさえ、普遍的なものであり、元型（アニメ、アニムス、シャドー、グレートマザーなど）的

イメージや象徴などを内包している。すべての心的産物は、それがまだ知られていない事実の最良の表現であるとき、象徴とみなすことができるというわけである。生きた象徴こそが治療力をもつこと、そのために治療者は象徴的態度をもって、クライアントの象徴を生きることが大切であることを力説している。さて個人的無意識では「雨」は主に複雑な恵みとストレス（憂うつや沈んだ気分など）として考察されるが、恵みとストレスを区別するのは雨にかかわるひとの表情であり、態度（肯定または否定）である。それでは、集合的無意識としての「雨」はどうか。

イメージシンボル事典（1984）によれば、雨の象徴は①豊饒（呪術と関連）、②神の恩寵、③浄化作用、④真理・英知・慈悲で雨は天の霊的感化力、⑤風雨では欲望、⑥どしゃぶりの雨では周期の終わりを画す、などがある。そして「水」の象徴のなかに、⑦に不安定、順応性、⑧苦しみ、などが記載されている。

世界シンボル大事典（1996）によれば、「雨」の象徴は、大地が天から受ける恩恵の象徴であり、②知恵（インドでは多産な婦人のことを雨と言う）である。また「水」は、①生命の源、②浄化の手段、③再生の中心、④根源への回帰や退行、などがある。

夢事典（2005）によれば、「雨」は感情や愛情の象徴であり、天からの恵みとして作物を育てるが、活動を妨害する場合もあり、雨の状態によって意味が異なってくる。①雨に濡れる（活動を妨げるようなトラブルの兆し）、②冷たい雨、みぞれ（冷遇されたり孤独に苛まれて意識が冷えきっている）、③梅雨・長雨（気分が減入るできごと、マンネリ）、④天気雨（思いがけないハプニング）、⑤穏やかな雨、温かい雨（感情が癒され、健康状態が良い、周りからの援助を得る）、⑥横殴りの雨（攻撃されていたり、

損害を被る）。また「水」は生命力の象徴、流動的でとらえどころがないため、心や感情、浄化を表す。

さらに精神分析では、「水」は欲望や感情の変動を表し、無意識のエネルギーと、魂の定まらない原動力と、密かな未知の動機の象徴である。表面と深部を区別し、深部は潜在意識の象徴となっている。

そして新約聖書では「水」は霊の象徴であり、大水は試練、災害の象徴である。

3) 日記に記述された「雨」：「土佐日記」の特徴

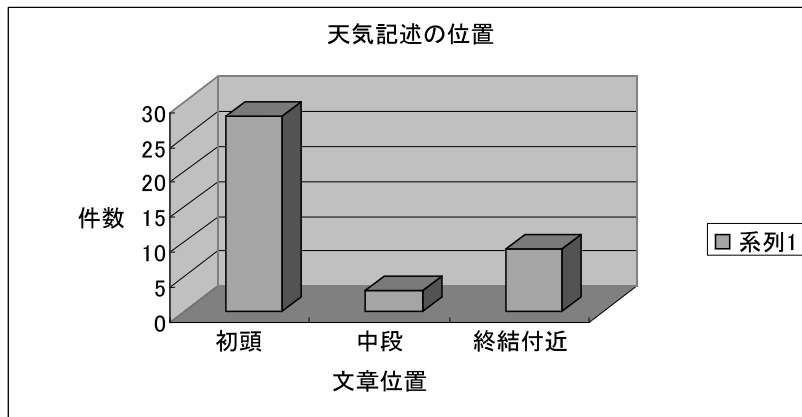
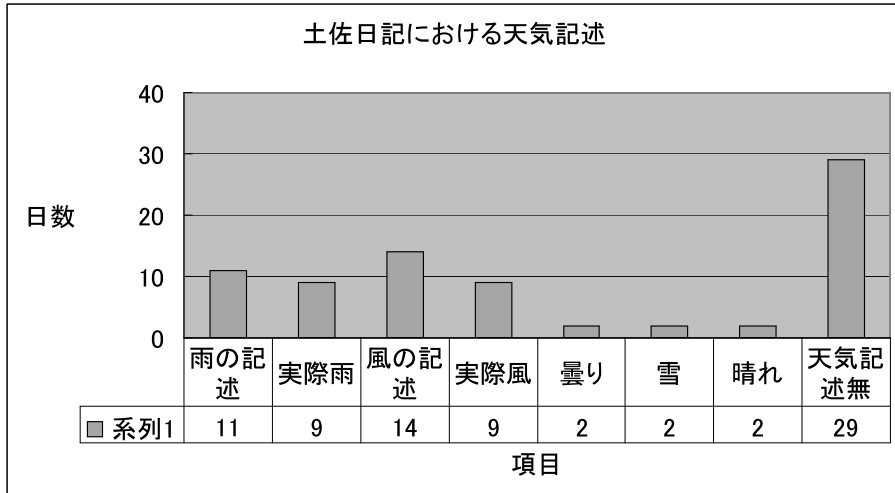
雨の表現における無意識の心理は、「ストレス」と「恵」として心理学的にも象徴化されている。ここでは土佐日記につづられた天候の表現を調べ、雨についても考察してみる。

<土佐日記での雨などの記述の特徴>

土佐日記は、12月21日から翌年2月16日までの55日間を、すべて記した日記である。雨の記述は11日間であるが、実際に雨が降っている描写は9日間である。①1月13日（ほんの少しだけ雨が降って、じきに止んでしまった）、②1月14日（雨になった）、③1月17日（雨が降り出した）、④1月28日（夜通しの雨）、⑤2月1日（朝の間の雨がお昼には止んだ）、⑥2月2日（雨風がいっこうに衰えない）、⑦（雨風がいっこうに衰えない）、⑧2月11日（雨が少しだけ降って止んだ）、⑨2月14日（雨が降る）。そして1月12日では「雨は降らなかった」、1月30日では「雨も降らず風もない」とある。

土佐日記の背景となる天候（雨風の記述）の特徴としては次のようにまとめることができる。

この天候記述の場所は、道長39歳の御堂関白記（1月14日から9月末）までの八ヶ月間、107日の天候記載においても似た傾向がみられ



る。初頭が97、中段が7、終結付近が17である。圧倒的に天候記載は初頭が多いことがわかる。

<土佐日記における天候記述の主な特徴>

これらの図を整理して、特徴をまとめると次のようになる。

- ① 簡潔だが細やかな雨（天気）の描写
- ② 晴天の記述がない（関白記では「天が晴れた」の潔いワンパターン表現が多い）：1月29日「日はうらうらと照る中」、1月22日「日は照ってまた曇る」
- ③ 全55日間の日記だが、天気記述は半数弱である（記述なし29日）

- ④ 天候の記述は圧倒的に初めが多い（7割）
- ⑤ 天候の流れに気分が流れた日が2日間、1月17日と2月5日であり、文章の前中後に天気描写があり、定まらない
- ⑥ 心情が明らかに投影されている描写がある。12月27日「空行く雲も去りかねて とどまっている」擬人法の表現に作者の心情が反映。
- ⑦ 評価感情的な表現が4日ある：1月15日「今日もまた日和が悪くて」、1月19日「天気が悪くて」、1月25日「北風がよくない」、2月4日「今日は風や雲の様子が格別によくない」。特に日和が悪いという表現は占いのかわからない点もある。

- ⑧ 終日の表現：1月27日「終日の風」、1月28日「夜通しの雨」
- ⑨ 雪に寄せる強調表現：1月18日「雪のみぞ降る」、1月16日「雪ぞ降りける」
- ⑩ 天気の不語は、7日目であり、12月27日「風も吹き出すだろう」から始まっているが、実際に天気を記述したのは1月4日であり、「風があって今日も船が出せない」である。

- ⑪ 天気の記述は、1月13日から2月16日までの間に多く、日記の前部と後部では非常に少ない

以上の特徴がみられたが、これらのことから無意識の心理状態を考察すると、次のようになる。

- ① 紀貫之は、複雑な心情（晴天がなく、雨の気分が微妙）で帰路についている。土佐への未練、馴染みのひととの別れ、京都での不安などが入り混じって、特に12月27日の「空行く雲も去りかねてとどまっている」という擬人法の表現に作者の心情が反映されている。煮え切れなさが去りがたくあった。そしてその心情調整に「風」を投影している。

風は動きを表し、それはとりもなおさず「行動の促進」と「心の転換」を促し、作者のこことからだの環境調整を可能にするものであった。それゆえに貫之は、無意識にも風を敏感に感じ取り、風の記述が一番多く（14件）記述していると考察できる。

- ② 紀貫之の雨の実際の記述は、9日間であるが、雨の粒や量（ストレス度合いを示す）が多いのは非常に少ないので、大きな悩みやストレスはあまり感じていなかったと言える。雨の多さが感じられる表現は「夜通しの雨」と「雨風がいっこうにおとろえない」の3日間であり、その雨量を推し量る記述がないところからも、ストレスに鬱々せずの外的思考型ではなかったかと思われる。

- ③ 紀貫之は「雪」に格別な郷愁を感じているのではないかと考察できる。和歌に読み、京を懐かしむくだりは、他の天候の記述の比ではない。この点からも貫之は根っこからの文芸人であったと言える。

(3) 御堂関白記における「雨など」に記述された無意識の心理の考察

1) 御堂関白記に多い「雨系」の記述

道長が御堂関白記に「繰り返し」として、おびただしく記述した無意識の心理がある。それは、道長が記した天気の記載である。しかも晴れの記述より雨の記述が多く、しかも雨の量や雨の湿り具合や、雷や雪にいたるまでの記述が詳しいことである。

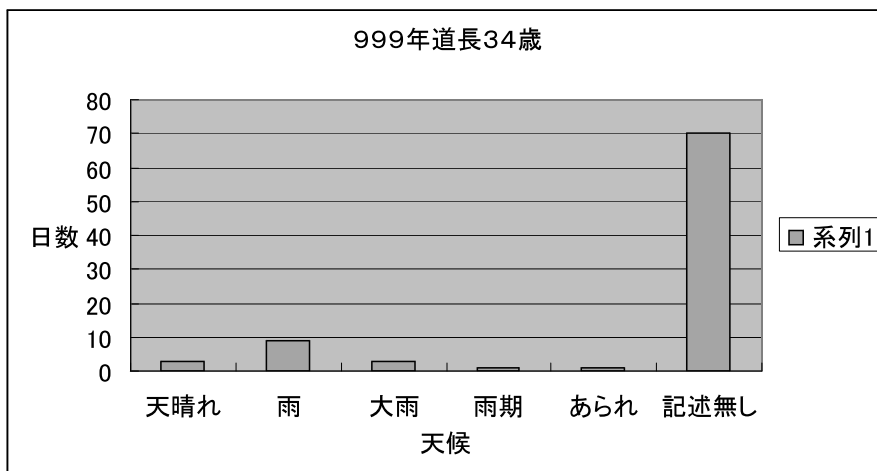
御堂関白記（倉本、2009）は、995年道長30歳の五月十一日から記されている。

995年は、5月から12月までの17日間の記載であるが、この記載には天候の記載は無である。それから3年後998年道長33歳では7月5日から7月10日の4日間の記載であるが、この年も天候の記載はない。999年道長34歳になっておよそ96日間の記載となるが、天候の記述無しは70日以上に及ぶ。これを図示すると次のようになる。999年は二月九日から記載され、「雨が降っていた。ところがすぐに晴れた」と天候が初めの方で述べられている。

雨に関する記述は、13日間に及ぶが、同じ日に二回雨の記述がある日もあった（2月2日、29日）。

1000年道長35歳では81日間の記載がある。1000年ではやはり、晴れまたは天が晴れたが（2日）は少なく、雨、小雨、大雨、雪、夕立などの記載が多い（11日）。999年、1000年共に雨に敏感になっている側面が伺える。

しかし1004年道長39歳では、330日前後（329日）の日記の記載がある。



そのなかで天が晴れたという記述は、65日を占めている。これは詳細な日記であると同時に、背景の晴れが多いことを示し、気分が爽快であった一年であったと言えよう。そして雨(小雨、大雨、雪、夕立など)が67日以上を占めているものの、曇りは少ない。記載無しは165日前後であり、日誌の半数は、天候の記載はないものの、この年は、活動と言語化が多かった年と言える。

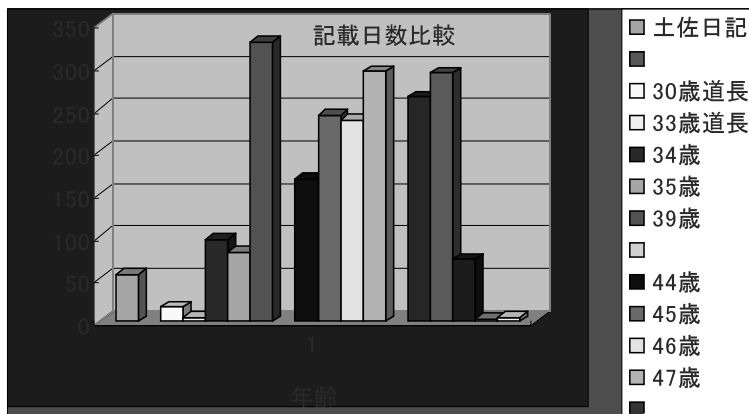
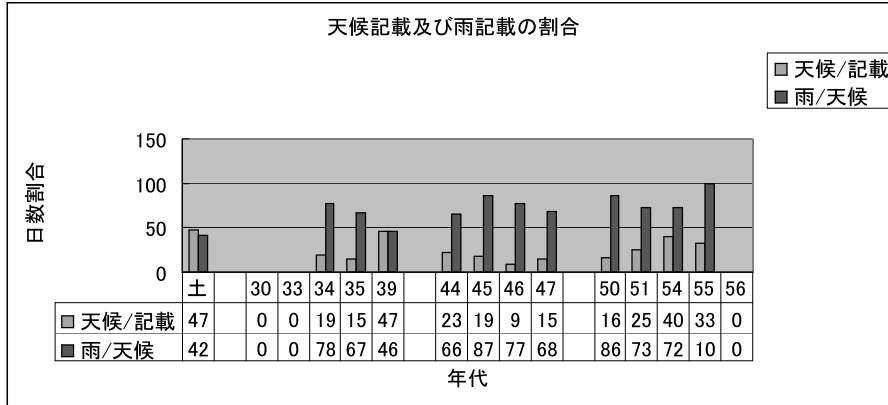
2) 御堂関白記の時期別における主な年の天候記載と雨系の記載

ここでそれぞれの巻から無作為に年齢を選び、天候記載と雨系の記載の割合を図にしたのがつぎの図である。土佐日記と比較して図示化して

いる。

土佐日記の記載日数に占める天候記載と天候に占める雨の割合、及び道長の記載日数に占める天候記載と天候に占める雨の割合は、明らかに大きな違いがある。道長はどの年齢においても雨系の記述が多いということである。上巻、中巻、下巻とグループを分け、主な年齢時を選んで調べてみても、39歳を除くとほとんどが、雨に敏感である。道長が39歳の時は、記載日数が329日あり、その中の天候記載割合と雨の割合が、土佐日記のそれと近似している。また日記記載の最初の年頃は天候の記載もなく、これは最後の年56歳でも同じである。次ぎにこれらの年齢時における日記記載日の総数を見てみよう。





3) 御堂関白記における「雨」の記載時間（朝、昼、夕方、夜中など）の心理の考察

道長は「雨」の記載が多く、天候記載のなかでは65%以上が多い。39歳時の49%を除くと、他は34歳77.8%、35歳66.7%、44歳65.8%、45歳86.6%、46歳77.3%、47歳68.2%、50歳86.0%、51歳72.6%、54歳72.4%、が雨の記述である。しかも雨の記述は、「大雨が降った」「夜通し雨が降った」「一日中大雨であった」「大雨が夜通し降った」「雷が落ちて大雨が降った」などの雨量や大粒の雨が考察できる。また「雨が降った」という記載は特に多く「昨夜から雨が降っていた」「早朝から雨が降った」「雨が止まらなかった」などもある。さらには「時々雨が降った」「小雨が降った」「雨気があった」「雨気が盛んであった」など雨に関しては詳しく記述さ

れている。

この雨の記述は、早朝、朝から、一日中、夜通し、などの時刻をも表現していることも多い。朝は清浄さを示し、なにものにもまだ染まらない、影響を受けない事始めのシンボルである。墮落、退廃などに損なわれていない始まりである。そして朝は清浄とともに希望や兆しの象徴でもある。これに比べて夜は、眠りと死を生む、夢と不満、愛情や欺瞞を生む象徴である。つまり夜は、育み、芽生え、画策の時を象徴し、そして昼になると爆発的に生命を帯びて具現化されてくる。夜は生きるものにとって潜在的であり、しかもカオスでさえある。この夜の曖昧さのなかで悪夢や怪物、お化け、陰謀などが駆け巡ることになる。しかし多くの象徴に、二重性が多いように、夜は暗闇で生成が起こると同時

に、昼間の準備期間とも言える。従って厳密に言えば、雨がどの時刻（朝、昼、夜など）に降ったことを記載しているかによって、道長の無意識の心理がより細かに考察できることになる。

一方「晴れ」に関しては「天が晴れた」の表現が多く、ワンパターンのである。ここから無意識の心理を考察すると次のようになる。

- ① 雨は個人的な無意識としてはストレスや、集合的無意識としては豊饒や再生、浄化などを象徴しているところから、道長は言語化しにくい不合理な感情を無意識的に雨で浄化し、流し、再生し、画策し、育みそして無意識に合理化したのではないかと考察できる。つまり雨の多様な記述によって、無意識にある自分の感情をカタルシスして自分支えをしていたのではないかと考えられる。雨の象徴の力によって、自ら癒す力を身につけ、自己治癒力を促進したのではないかと考えられる。ユングが「生きた象徴こそが治癒力をもつ」と力説していたように、道長にとって雨は「恵」と「浄化」「再生」「画策」「愛情」の象徴として治癒力をもったのではないかと思われる。
- ② しかも道長の雨の記述には、「冷たい雨」とか「身を切るような雨」などの感情が賦与した表現はなく、雨の量や粒を思わせる表現が多いところからも、無意識から無意識へと浄化したものと思われる。「恵」や「恩恵」に敏感であり、冷遇や孤独、攻撃などはうまく回避してきたと思われるのが特徴である。そこにはむしろ楽天的、受け身的なうつ性を感じられる。しかしながら道長が晩年になって感情を投影していると思われた雨の記述が数例ある。

1012年道長47歳：3月11日：七日から雨が降っている。昼夜、射るようである。今日天が晴れた。この何日か病脳していたので、外出しなかった。1012年8月8日：春から雨が

降ったことは乏しかった。特に十日頃からは雨が降らなかった。天下の愁いは甚だ盛んであった。

1016年道長51歳：5月20日、暴雨が降った。1017年道長52歳5月16日：雨が降ったことは矢を射るようであった。5月25日：午刻雨が降ったことは、矢を射るようであった。

矢を射るような雨の表現は、なんらかの攻撃性を感じていた表現ととれる。「物忌み」や「病脳」のことが増えてきている頃に、周りからの不協和音が感じられ無意識に表現した雨の表現と言える。

- ③ 道長の天候の記載は、土佐日記と比較すると甚だ少ないのが風である。風は動きや環境調整を表現し、こころの動きや積極性、周囲の変化などを表す無意識である。しかし道長が、風を記載したの雨と比較するとかなり少ない。

1004年道長39歳11月23日：御前の儀は常と同じであった。御楽の近衛の者、5、6人などを召し伺候させた。中宮が上っていらっしゃった。御前の儀が終わって退出した。女方も、これに同行した。一日中、夜通し風が吹いた。

常と同じに秘められた夜通しの風は、不穏な空気を無意識に感じていたことを思わせる。道長の記載には「常と同じであった」の表現が多い。しかしその後夜通しの風を書いた文は他にはない。

1015年道長50歳7月25日：加賀守妻宅の検討、未だ解かれずの見出しで始まる日記である。夜に入って風が吹いた。中宮がおっしゃって云ったことには「ある●家の検封を解く」ということであったが、未だ検封を解いていない」ということであると。また中宮にはお怒りの様子が有ったようである。同年同月26日：夜通し風が吹いた。雨は降らなかった。

大風と云うべきであろう。

ここでは、怒りの表現としての風が象徴化されている。

1018年道長53歳2月12日：中宮に参った。候宿をした。この何日か風雪が晴れる日は無かった

関白記における晩年は、「矢を射るような雨」や「暴雨」「夜通しの大風」「風雪が晴れることがなかった」などの記載が多くみられ、物忌みの増加に相まって、安穩・安泰が影を潜めていったのではないかと考察できる。

- ④ 道長の日記はそれでも、天候記載は土佐日記に比すと少ないのが特徴である。天候記載が日記記載日の4割以上を占めるのが39歳と54歳であり、調べた年齢11年をみても、9件は2割弱の天候記載である。それだけに道長は、現実的に感情抜きで対応してきたと考えられ、儀式や行事、対人関係に合理的、慣習的に対応してきたと云える。

物忌みと雨の表現を除いては、その無意識の心中を押し量りにくいほど、客観的に記載してきたと云える。そして雨や物忌みの象徴を生きて自己治癒してきたと結論づけることができる。またほぼ同じ年代に出された『権記』の藤原行成(2011)の日記では、天候の記述はほとんどみられない。991年から1001年までで雨は10回、晴れは1回しか記載されていない。儀式の遂行において、晴儀と雨儀は、全く異なるので、道長は儀式を主催する地位なので、より神経過敏に天候記載を無意識にしていたという一因も考えられる。

引用文献

- ① 平安貴族の夢分析 吉川弘文館 倉本一宏 2008
② 藤原道長「御堂関白記」上 講談社学術文庫 倉本一宏 2009

- ③ 藤原道長「御堂関白記」中 講談社学術文庫 倉本一宏 2009
④ 藤原道長「御堂関白記」下 講談社学術文庫 倉本一宏 2009
⑤ 「夢」の心理学的考察 日本文化研究第7号 蘭香代子 2007 p 100-115
⑥ 女子大学生にみられる夢の意義と内容についての実態調査研究 駒沢女子大学研究紀要第13号 蘭 香代子 2006 p 1-14
⑦ 童話療法—「物語り」と「描画」による表現療法— 誠信書房 蘭 香代子 2008
⑧ 世界シンボル大事典 大修館書店 ジャン、ミュヴァリエ、アラン、ゲールブラン共著 1996年 p 39-40、p 937-945
⑨ イメージシンボル事典 大修館書店 アト、ド、フリーズ著 山下主一郎訳代表 1984年 p 516、p 678-679
⑩ 夢事典 日本文芸社 秋月さやか 2005年 p 34-35
⑪ 心理臨床大事典 培風館 氏原寛ら編著 2005(改訂版) p 1091-1094
⑫ 土佐日記・更級日記 学研 竹西寛子 1981 p 5-69
⑬ 日本の古典6 蜻蛉日記・枕草子 集英社 1979 木村正中ら編
⑭ 藤原行成『権記』講談社学術文庫 上巻、中巻、下巻 倉本一宏 2011

(付記:本研究は、国際日本文化研究センターにおいて、平成22年度から平成24年度にわたって行われた共同研究(代表者:倉本一宏)『日記の総合的研究』の一研究である。23年12月18日に発表し、多くの助言をいただき、深く御礼申し上げます。さらに研究会参加を快く承認していただいた駒沢女子大学学長先生に深く感謝申し上げます。英文は杉長先生に感謝します。)